



TITLE:

芥川龍之介の道標 (吉田城先生追悼  
特別号) -- (思い出)

AUTHOR(S):

互, 盛央

---

CITATION:

互, 盛央. 芥川龍之介の道標 (吉田城先生追悼特別号) -- (思い出). 仏文研究 2006, S: 452-455

ISSUE DATE:

2006-06-20

URL:

<https://doi.org/10.14989/138021>

RIGHT:

## 芥川龍之介の道標

互 盛 央 Morio TAGAI

手許にある大著『『失われた時を求めて』草稿研究』を手にとって表紙をめくる。見返しにペン書きされた控えめな文字が目飛び込んでくる。末尾に記された「一九九七年六月二十一日 吉田城」という日付を付された署名をほぼ十年ぶりに目を見ると、その日の記憶が意外なくらい鮮やかに甦る。そこから始まった不思議な縁に驚きと感謝を覚えながら。

夏の訪れを感じる土曜日の午後、上京されていた先生と初めてお会いしたのは新宿の喫茶店だった。前年に就職して担当することになった『芥川龍之介全集』（全24巻）（1995年11月～98年3月）に添付していた「月報」に収録する小文の執筆をご快諾いただき、そのための資料をお見せするのが目的だったが、本心を言えば、まだまるで慣れていない編集者としてではなく、つい二年前までフランス語を勉強する学生だった者として、あの吉田城先生にお会いできる喜びのほうが大きかったように思う。

吉田城先生と芥川龍之介——意外な組み合わせであることは百も承知だったが、新米編集者なりに「あて」があったことも事実である。実に五回目となる新編集による全集の最大の売り物が、それまでほとんど紹介されたことのなかった未発表原稿の収録にあったからだ。大部分が甲府の山梨県立文学館に所蔵されている膨大な原資料を前にしてすぐ気づいたのは、綿密に計算された技巧的な短篇を書いた芥川龍之介がその背後で大量の草稿を残していたという事実だった。例えば、初期の作品「鼻」（1916年2月）の草稿がある（全集第21巻）。そこに見られる「何故と云へば 今人々の顔に動いてゐる可笑しさうな容子には この解釈で満足させる事の出来ない或意味が隠れてゐるやうに見えるからである」という一節は原稿用紙二枚にまたがる個所にあたるが、その一枚目は「……可笑し」の部分で終わり、二枚目は「さうな容子には……」で始まっている。残された草稿には、右に引いたものの他に「さうな容子には この解釈で満足させる事の出来ない或意味が隠れてゐるやうに見えるのである」と書き出された原稿用紙や、「さにはもう少し深さがある」と書き出された原稿用紙が見出される。芥川の草稿には、生前未発表の作品断片やノート、メモの他に、こうした発表作品の異文（ヴァリエント）が大量に含まれていたのだ。むろん、編集者の責務はこれらを可能なかぎり利用しやすい形で収録することにあったが、その一方で脳裏をよぎっていたのは、日本近代文学ではあまり例のない発

表作品の異文を含む草稿の紹介という試みをもつ意義やそれを読む楽しさを少しでも読者に伝えられないだろうか、という思いだった。そのとき、すぐに想起されたのが吉田城先生のお名前だったことは言うまでもない。そんな夢のような依頼を快く引き受けてくださった先生に芥川の草稿の一端でもお見せし、執筆の材料にさせていただくべく新宿に出かけた土曜日の午後だったわけである。

お目にかかる前日、空いた時間を利用して作った資料がある。右で触れた「鼻」のほか、「秋」（1920年4月）、「雛」（1923年3月）といった、とりわけ異文が多く残された作品を選び、ワープロでその草稿をすべて活字に翻刻してみた。横長にした大きな紙のいちばん上に最も枚数の多い草稿群を並べ、その下に対応する異文を置いていく。作業を終えてみると、個所によっては数種類に及ぶ異文を一望できる資料が完成しており、われながらよい出来だと悦に入りながら、吉田先生にお見せするのをひそかに楽しみにしていたのを覚えている。はたして喫茶店のテーブルにはおさまりきれない大きな紙を前にした先生がしきりに感心しながら興味を寄せてくださっているのを目にし、自分の夢は単なる思いつきでなかったと感じていた。先生にお渡ししたその大きな紙は、むしろ一つしかないものだから、もう手許にはない。きっと軽い興奮を覚えながらご覧になられたその資料の中から「雛」の草稿を題材に選んで執筆してくださったのが、芥川について吉田先生が初めて発表された文章となる「テキストの舞台裏を読む」（全集第22巻「月報21」）だった。改めて見てみると、発行は1997年10月30日。新宿での打ち合わせから四カ月後のことである。先生が執筆に取り組まれた四カ月のあいだ、編集部は原資料の細部を確認するために甲府の文学館を幾度も訪れつつ、刊行の近づく草稿の巻の準備に専心した。学生時代にプルーストを扱う授業でレポートを書くために買い求めた『『失われた時を求めて』草稿研究』を持参し、記念にいただいたご署名は、初めての大規模な企てに五里霧中で進むしかない編集作業を導く道標のような気がしていた。

新全集で未発表原稿を収録した巻を刊行順に挙げると、未発表作品の原稿を収めた第22巻、発表作品の草稿を収めた第21巻（1997年11月）、講演メモや手帳など、原稿用紙以外のものに書かれた自筆資料を収めた第23巻（1998年1月）となる。思い出しても困難な編集作業を要する巻だったが、中でも第23巻に収録した「講演メモ」に分類される資料には別種の難しさがともなっていた。これは芥川が講演を行う際に作成した準備ノートで、エドガー・アラン・ポーを扱った「短篇作家としてのポー」や「ポーの一面」、芥川独自の文学に対する見解を示した貴重な資料「山梨夏期大学講義」などがそれにあたるが、これら

のノートのいずれもが相当量の欧文で記された個所を含んでいたからである。とりわけ山梨県教育会主催による「高原夏期大学」(1923年8月2～5日)で四日間にわたって行われた講演の準備ノート「山梨夏期大学講義」は、全篇にわたって文学用語や欧米の作家や作品、その登場人物の名が決して読みやすいとは言えない文字で原語のまま記されており、作業は困難を極めた。頂戴したご文章を掲載した「月報」を収めた巻が刊行された1997年秋、再び吉田先生に連絡した。これらの資料の校訂をお手伝いいただけないか、という突拍子もないお願いである。

今にして振り返れば、その頃すでに先生の中では芥川に対する関心が高まっていたのだろう、原資料の写真版をご覧になった上でご快諾をいただいた。その後、手帳やその他のメモなど、やはり欧文の頻出する原資料の校訂を追加でお引き受けいただき、結果的に先生が担われた作業量は相当なものになったが、そのすべてについて先生は綿密な調査に基づく解説に専心され、かくして全資料の完全な活字化が実現することになる。

今でも鮮明に残っている記憶がある。上に触れた「山梨夏期大学講義」の解説結果を送ってくださった時にいただいた言葉である。ノートの写真版に下作業として自分で翻刻した結果を同封し、それに加筆・訂正していただく形での作業をお願いしたのだが、先生の手で至る所が訂正されて真っ赤になった資料には、お手紙が添えられていた。「苦勞して翻刻したことはよく分かるが、こうした作業に取り組む時は毎日図書館にこもり続ける覚悟で併行して調査を行わなければいけません」と、新米編集者に向けられた嗜めとも励ましとも思える言葉がそこには書かれていた。テキストに対する厳しさ。書物を作ることへのこだわり——「草稿を読む」という営みそのものを体現しているかのごとき真っ赤な資料の向こう側にかいま見た先生の姿勢は、今に至るまで書物を作る仕事すべてにおいて、自分の道標であり続けている。

日本近代文学の専門家とフランス文学の専門家の共同作業という形で第23巻が刊行されたのは、翌1998年1月である。ちょうどその直後、「羅生門」(1915年11月)の草稿に精緻な分析を加えた論考「盗人の誕生」(『文学』第9巻第4号)のお原稿を送ってくださり、『文学』編集部に仲介したことを思い出すと、おそらくその冬の先生は芥川三昧の日々を送っておられたのだろう。その後、先生の芥川研究が「草稿分析」と呼びうる範囲をはるかに越え、さらには日本という枠組みをも越えて、個別的な作品批評や芥川旧蔵書の分析が日本語のみならずフランス語でも発表されることになるのは周知のとおりである。先日、編集委員を務めていただいた先生にお目にかかる機会があり、新全集刊行後の

研究動向について質問したところ、専門家から草稿研究が出現するにはまだ時間がかかりそうだ、とのお答えだった。専門研究者ですら扱いに困難を覚える芥川の草稿を誰よりも早く、誰よりも精力的に論じることができたのは、長年ブルーストの草稿に取り組まれた吉田先生だからこそ可能な業だったことを改めて実感する。

その後、瞬く間に時は過ぎ、いくつかの全集を手がける傍ら、単行本を企画するようになった。そんな生活の中で常に頭の片隅にあったのは、いつの日か『失われた時を求めて』草稿研究』に匹敵するような芥川の草稿研究の本を吉田先生と作りたい、という新たな夢想だった。先生が残された芥川に関する文章を前にすると、そのいくつかにこんな言葉が付されていることに気づく。「筆者の芥川研究は、最初岩波書店芥川全集の編集に協力する形で、欧文自筆メモ類の調査をおこなったことが直接のきっかけである」（「芥川龍之介旧蔵書にみるフランス文学の痕跡」、『TRANS』第1号、3頁）。一人の新米編集者の夢想が、不世出の偉大なブルースト研究者を芥川龍之介に誘う道標となるなど、めったにあることではないだろう。そんな偶然が織りなす縁に思いを馳せるとき、新全集との関わりをご自身の道標であるかのように記す先生の言葉は、新たな夢想を実現する機会が永遠に失われてしまったという事実を容赦なく突きつけてくる。

今、編集者である私の前には、先生が残された珠玉の論考たちがある。

（たがい・もりお 岩波書店編集部）